山口大学教育学部研究論叢　第 71 巻　41 頁～ 47 頁　2022 年 1 月

# 道徳基盤に対する道徳意識と寛容性と他者受容の関係

中村　天音 *・沖林　洋平

Relationship Between Moral Awareness and Tolerance Toward Moral Foundations and Acceptance of Others.

NAKAMURA Amane*, OKIBAYASHI Yohei

（Received September 24, 2021）

キーワード : 道徳基盤，道徳意識，寛容性，他者受容
Key Words: Moral Foundations, Moral Attitude, Tolerance, Acceptance of others

**はじめに**

本研究の目的は，寛容性と道徳基盤に対する共感が他者受容に及ぼす影響を検討することである。

心理学において寛容性は，政治的な寛容性と個人的な寛容性という２つの立場から検討されてきた。前者は主に，言論の自由や宗教の自由などの人権の理解を扱う。後者は，仲間集団からの排斥や，自分と異なる意見を持つ他者に対する態度など，身近な問題に焦点づけたものである長谷川(2014)。長谷川(2014)は，寛容(tolerance)を，自身と異なる，行動，信念，身体的能力，宗教，慣習，エスニシティ，ナショナリティなどを持つ他者を受け入れることと定義している。類似の概念として，許し(forgiveness)，容赦(legal ardon)，和解(reconciliation)などがあるが，異質な他者に対する理解や態度という側面に着目したものである。

近年，人は一貫して寛容，あるいは不寛容なのではなく，問題の領域によって寛容な態度を示したり不寛容になったりすることが指摘されている(Wainryb, Shaw & Maianu, 1998)。人道徳的問題と抵触するとき排除を認める傾向があること，また，信念を持つこと，公的に表現すること，信念に基づく行為をすること，その行為をする人，という４種類の寛容性の側面の発達を調べ，寛容か不寛容かはあらゆる年齢で見られる(Wainryb, Shaw & Maianu, 1998)。Wainryb et al. (2004)は，5歳，7歳，9歳の子どもに対し，道徳，事実，曖昧な事実(ambiguous fact),好みという４つの領域についての寛容性を検討し，「自分が不賛成の信念を他者は持ってよいのか」を寛容性の判断として求めた。その結果，5歳よりも７，９歳の方が寛容性が高く，また年齢に関係なく道徳よりも事実，曖昧な事実，好みに対しての寛容性が高かった。

他者に対する寛容性は領域一般的なものではなく，問題の領域によって寛容であったり不寛容であったりすることが指摘されている。長谷川(2014)は，幼児，小1生，小2生，小3生を対象として，「道徳」，「事実」，「曖昧な事実」，「好み」の4領域の意見について「どちらの考えが正しいか，両方の考え正しいか(相対主義の理解)」，「A,Bそれぞれが実験参加児に遊ぼうと言ったらどう思うか(寛容性)」を尋ねた。その結果，寛容性判断において年齢とともに道徳領域が分化することを明らかにした。長谷川(2014)は，他者に対する寛容性には個別の発達と問題の領域が関係することを示したといえる。

このような，社会的事象に関する他者に対する態度とは別に，個人としての善悪の判断過程がある。道徳とは，一般的には，「ある社会で，その成員の社会に対する，あるいは成員相互間の行為の善悪を判断する基準として，一般に承認されている規範の総体」のことである。特別の教科道徳の教育目標は，自己の生き方を考え，主体的な判断の下に行動し，自立した人間として他者と共によりよく生きるための基盤となる道徳性を養うこと(文部科学省，2017)である。道徳性における心的機

＊ 下関市立安岡小学校

能とは，道徳的判断力，道徳的心情，道徳的実践意欲と態度によって構成される(京都府教育委員会，2018)。特別の教科道徳は道徳的諸価値の理解を通して道徳性を養うことが行われる。道徳的諸価値とは，小学校低学年では19，中学校では22の項目によって構成されるリストである。このような考え方は，道徳性に関する領域を想定していると考えられる。道徳性に関する心理学の研究では，近年道徳基盤にモデルが提唱されている(ハイト，2014)。ハイト(2014)は，人間が生来的に，正義，道徳といった「社会的な善」へのこだわりを有しており，これを道徳基盤と呈した。政治や宗教など根深いところでの対立の多くは，その人が拠って立つ価値観，世界観の違いから生じることで，これらを方向付けるものが，道徳基盤であるとしている。Table1に道徳基盤の6類型とその特徴(ハイト，2014)を示す。

他者受容　対人関係において重要となる自己と他者の相互調整においては，ありのままの自己や他者を受け入れることが不可欠である(上村，2007)。また，自己受容や他者受容は対人関係を良好にする効果や精神的健康を高める効果を持つ一方で，極めて高い自己受容にある者は必ずしも良好な対人関係をとることができないことが指摘されている(清兼・鈴木・五十嵐，2013)。自己受容はこれまで，適応やパーソナリティなど様々な要因を関連が検討されており，自己受容と他者受容には正の相関関係が示されている(沢崎，1985)。その一方で，自己受容が高いにも関わらず他者受容が低い者，自己受容は低い者の他者受容が高い者は，対人関係の中で不適応な態度を示すことを指摘している。自己受容が高いと必ずしも適応であるとは言えず，他者受容とのかかわりの中で重要な効果を持つことが指摘される(清兼・鈴木・五十嵐，2013)。他者受容に関する心理尺度では，「内在化志向意識」「内在化志向行為」「外在化志向意識」「外在化志向行為」の４つの下位尺度が存在する。また，先行研究において，内在化志向は，自己の意識や感情を基に自己や他者に対すること，外在化志向は他者の意識や感情を基に自己や他者に対することという機能を持つ(吉田・澤野・服部，1991)。

Table1　道徳基盤の概要(ハイト，2014)

| |
|---|
| 〈ケア/危害〉基盤 |
| 「自ら身を守る方法を持たない子どもをケアすべし」という適応課題に対応する過程で進化。それは，他者が示す苦痛や必要性の兆候に気づけるよう，また，残虐行為を非難し，苦痛を感じている人をケアするよう私たちを導く。 |
| 〈公正/欺瞞〉基盤 |
| 「他人につけ込まれないようにしつつ協力関係を結ぶべし」という適応課題に対する過程で進化。それは，協力関係を結ぶのにふさわしい人物を容易に見分けられるようにする。また，人を欺くペテン師は避けたい，あるいは罰したいと思わせる。 |
| 〈忠誠/背信〉基盤 |
| 「連合体を形成し維持すべし」という適応課題に対する過程で進化。それは，チームプレイヤーを見分ける際に役立つ。そしてチームプレイヤーには信用と報酬を与え，自分や自グループを裏切る者を，傷つけ，追放し，ときには殺すよう私たちに仕向けることがある。 |
| 〈権威/転覆〉基盤 |
| 「階層的な社会のなかで有利な協力関係を形成すべし」という適応課題に対する過程で進化。それは，階位や地位に対して，あるいは人々が分相応に振舞っているかどうかについて，私たちを敏感にする。 |
| 〈神聖/堕落〉基盤 |
| 最初は「雑食動物のジレンマ」の適応課題に対応する過程で，そしてさらに，病原菌や寄生虫に汚染された環境で生きていかなければならないという，より広範な問題に適応する過程で進化。それには，象徴的な物や脅威に警戒を抱かせる行動免疫システムも含まれる。それはまた，ポジティブであれネガティブであれ，グループの結束を強化するのに必要な，非合理的で神聖な価値を有する何人かに人々の労力を投資させるものでもある。 |
| 〈自由/抑圧〉基盤 |
| 「機会さえあれば他人を支配し，脅し，抑制しようとする個体とともに，小集団を形成して生きていかなければならない」という適応課題に対する過程で進化。それは，互いに結束して，いばり屋や暴君に抵抗し，その支配を打ち倒そうとする衝動を人々にもたらす。また，左派の平等主義と反権威主義を，さらには「私を踏みつけるな」「私に自由を」と声高に叫ぶリバタリアンと一部の保守主義者の，政府に対する怒りを支える源泉でもある。 |

本研究では，6つの道徳基盤に対する道徳意識と寛容性の変数間の関係を検討する。また道徳基盤の違いによる他者受容の影響について検討する。

そこで，本研究では仮想的な会話場面を設定し，実験参加者自らが発言する状況であると仮定した際，発言できると回答した人と発言できないと回答した人，あるいは発言しないと回答した人，それぞれの回答の違いに他者受容と発言抑制が与える影響について検討することを目的とした。

同時に，実験参加者それぞれがもつ道徳基盤に対する道徳性が，他者受容と発言抑制に及ぼす影響，さらには，他者受容と発言抑制の相互の関係性についても検討することにした。

## 方　法

**実験参加者**　2020年12月に実施した。大学生212名(男性84名，女性128名) を分析対象者とした。

**倫理的配慮**　本研究への協力に同意した者を調査対象者とした。実験課題への回答は無記名であり，回答は任意であること，得られた情報については厳重に管理し，研究以外の目的では使用しないことを回答用紙の冒頭に記述した。

**手続き**　参加者はGoogleフォームで作成したウェブ画面上に表示されるアンケートに回答した。はじめに，「まず，あなたのことについてお尋ねします。」という教示ののちに，フェイス項目に回答した。次に，「会話文を読み，以下の内容において，自分の考えに近いものを選んでください。」という教示ののちに，６問及び自由記述１問について回答した。さらに，「あなたの価値観について教えてください。」という教示ののちに，道徳基盤に対する共感能力および寛容性の項目を５問について回答した。そして，「以下の項目について，あなたの考えに当てはまるものにチェックしてください。」という教示ののちに，他者受容尺度18問について回答した。標準的な回答時間は15分であった。

**調査項目**

**道徳性項目**　ハイト（2014）が示した道徳基盤の7領域から4領域（ケア基盤，厚生基盤，中世/配信基盤，堕落基盤）を用いた。評定は「とてもそう思う（7点）」から「全くそう思わない（１点）」までの７件法である。得点が高い人ほど道徳性が高いことを示す。

**寛容性項目**　長谷川(2014)の研究１において行われた寛容性判断をもとに，場面設定された会話文と道徳基盤の質問において，「友達になりたいか」と問うた質問の回答から検出。評定は「とてもなりたい（4点）」から「絶対になりたくない（1点）」までの4件法である。なお，寛容性項目において，得点が高いほど寛容性が高いことを示す。

また，本研究では，道徳性と寛容性について平均値基準として高低に分け，道徳性と寛容性に関する4類型を設定した。すなわち，道徳性と寛容性の両方が高い群を高高群(以下「HH」)高低群(以下「HL」)低高群(以下「LH」)低低群(以下「LL」)の4群である。

**他者受容項目**　自己・他者受容尺度(吉田・澤野・服部,1992)を基に選別した他者受容尺度を使用した。内在化志向意識,内在化志向行為,外在化志向意識,外在化志向行為因子の18項目で構成される。評定は，「とてもよく当てはまる（7点）」から「全く当てはまらない（1点）」までの7件法である。本研究では，外在化志向得点は逆転項目として処理した。内在化志向と外在化志向の両方で，得点が高いほど他者受容傾向が高いことを示す。

## 結　果

本研究で用いた道徳性と寛容性と他者受容の記述統計をTable2,Table3,Table4に示す。次に変数間の相関分析の結果をTable5，6に示す。寛容性は，ケア基盤寛容性と公正基盤寛容性，ケア基盤寛容性と忠誠基盤寛容性，ケア基盤寛容性と背信基盤寛容性，ケア基盤寛容性と堕

Table2 道徳意識の平均値と標準偏差

| | 平均値 | 標準偏差 |
|---|---|---|
| ケア基盤 | 6.71 | 0.73 |
| 公正基盤 | 6.33 | 0.84 |
| 忠誠基盤 | 6.00 | 1.17 |
| 背信基盤 | 6.40 | 1.00 |
| 堕落基盤 | 6.57 | 0.75 |

Table3 寛容性の平均値と標準偏差

| | 平均値 | 標準偏差 |
|---|---|---|
| ケア寛容性 | 1.85 | 0.68 |
| 公正寛容性 | 2.01 | 0.62 |
| 忠誠寛容性 | 1.94 | 0.72 |
| 背信寛容性 | 1.87 | 0.77 |
| 堕落寛容性 | 1.77 | 0.66 |

Table4 他者受容の平均値と標準偏差

| | 平均値 | 標準偏差 |
|---|---|---|
| 内在化志向意識 | 3.63 | 0.96 |
| 内在化志向行為 | 3.03 | 0.99 |
| 外在化志向意識 | 5.16 | 0.80 |
| 外在化志向行為 | 4.87 | 0.74 |

Table5 道徳意識の相関係数

| | ケア基盤 | 公正基盤 | 忠誠基盤 | 背信基盤 | 堕落基盤 |
|---|---|---|---|---|---|
| ケア基盤 | 1.00 | | | | |
| 公正基盤 | .12+ | 1.00 | | | |
| 忠誠基盤 | .19** | .27** | 1.00 | | |
| 背信基盤 | .03 | .04 | .05 | 1.00 | |
| 堕落基盤 | .27** | .15* | .16* | .16* | 1.00 |

Table6 寛容性の相関係数

| | ケア基盤寛容性 | 公正基盤寛容性 | 忠誠基盤寛容性 | 背信基盤寛容性 | 堕落基盤寛容性 |
|---|---|---|---|---|---|
| ケア基盤寛容性 | 1.00 | | | | |
| 公正基盤寛容性 | .39** | 1.00 | | | |
| 忠誠基盤寛容性 | .33** | .42** | 1.00 | | |
| 背信基盤寛容性 | .18** | .32** | .33** | 1.00 | |
| 堕落基盤寛容性 | .31** | .17* | .31** | .41** | 1.00 |

落基盤寛容性，公正基盤寛容性と忠誠基盤寛容性，公正基盤寛容性と背信基盤寛容性，公正基盤寛容性と堕落基盤寛容性，忠誠基盤寛容性と背信基盤寛容性，忠誠基盤寛容性と堕落基盤寛容性，背信基盤寛容性と堕落基盤寛容性，という全ての相関関係で，正の相関関係( $r$=.39;$r$=.33;$r$=.18;$r$=.31;$r$=.42;$r$=.32;$r$=.17;$r$=.33;$r$=.31;$r$=.41)が見られた。これをTable5に示す。道徳基

盤は，ケア基盤と忠誠基盤，ケア基盤と堕落基盤，公正基盤と忠誠基盤，公正基盤と堕落基盤，忠誠基盤と堕落基盤，背信基盤と堕落基盤で正の相関関係( $r$=.19;$r$=.27;$r$=.27;$r$=.15;$r$=.16;$r$=.16)が見られた。これをTable6に示す。他者受容は，内在化志向意識と内在化志向行為，外在化志向意識と外在化志向行為で，正の相関関係( $r$=.62;$r$=.43)が見られた。また，内在化志向意識と外在化志向意識，内在化志向行為と外在化志向意識，内在化志向行為と外在化志向行為で，負の相関関係( $r$=-.30;$r$=-.48;$r$=-.14)が見られた。これをTable7に示す。発言抑制は，自分志向とスキル不足，自分志向と規範・状況，自分志向と関係距離確保，スキル不足と関係距離確保，規範・状況と関係距離確保で，正の相関関係( $r$=.54;$r$=.19;$r$=.34;$r$=.17;$r$=.31) が見られた。また，自分志向と相手志向，相手志向と規範状況で負の相関関係( $r$=-.23;$r$=-.32)が見られた。これをTable8に示す。

**道徳基盤と他者受容，発言抑制**

道徳基盤グループを基に作られた，道徳基盤コード5群について，各群の他者受容ならびに発言抑制の特徴を明らかにするため，各群それぞれを参加者間要因とする１要因分散分析を行った。ケア基盤，公正基盤，忠誠基盤の各尺度得点と分散分析結果をTable7,Table8,Table9に示す。まず，ケア基盤コードでは，他者受容の内在化志向意識において，有意な主効果が見られた。( $F$(2,206)=8.08,$p$<.01)。Holm法による多重比較の結果，LHグループやHLグループがHHグループより有意に高かった。( $t$(204)=2.91,$p$<.01; $t$(204)=3.49,$p$<.01)。他者受容の内在化志向行為においても，有意な主効果が見られた。($F$(2,206)=4.71,$p$<.01)。

Holm法による多重比較の結果，LHグループやHLグループがHHグループより有意に高かった。( $t$(204)=2.10,$p$<.01;  $t$(204)=2.75,$p$<.01)。これらをTable11に示す。

Table7

道徳意識と寛容性の高低によるケア基盤の各尺度得点と分散分析，多重比較の結果

| | LH | HL | HH | F 値 | 多重比較 |
|---|---|---|---|---|---|
| 内在化志向意識 | 3.80(.12) | 4.01(.06) | 3.38(.09) | 8.08 | LH,HL>HH |
| 内在化志向行為 | 3.16(.12) | 3.36(.06) | 2.84(.09) | 4.71 | LH,HL>HH |
| 外在化志向意識 | 5.02(.10) | 5.02(.14) | 5.27(.08) | 2.47 | |
| 外在化志向行為 | 4.88(.08) | 4.69(.13) | 4.93(.07) | 1.34 | |

Table8
道徳意識と寛容性の高低による公正基盤の各尺度得点と分散分析，多重比較の結果

| | LH | LH | HL | HH | F 値 | 多重比較 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 内在化志向意識 | 3.89(.11) | 3.51(.09) | 3.52(.17) | 3.28(.30) | 2.93 | LH>HH |
| 内在化志向行為 | 3.21(.12) | 2.85(.10) | 3.30(.17) | 2.80(.31) | 4.71 | LH,HL>HH |
| 外在化志向意識 | 4.97(.10) | 5.27(.08) | 5.10(.14) | 5.53(.25) | 2.47 | |
| 外在化志向行為 | 4.72(.09) | 4.97(.07) | 4.88(.13) | 4.92(.23) | 1.34 | |

Table9
道徳意識と寛容性の高低による忠誠基盤の各尺度得点と分散分析，多重比較の結果

| | LH | HL | HH | F 値 | 多重比較 |
|---|---|---|---|---|---|
| 内在化志向意識 | 3.59(.13) | 3.86(.13) | 3.52(.09) | 2.27 | HL>HH |
| 内在化志向行為 | 2.85(.13) | 3.42(.13) | 2.94(.10) | 5.63 | LH>HL,HH |
| 外在化志向意識 | 5.25(.11) | 4.93(.11) | 5.24(.08) | 3.17 | LH,HH>HL |
| 外在化志向行為 | 4.91(.10) | 4.68(.10) | 4.95(.07) | 2.72 | LH,HH>HL |

次に，公正基盤コードでは，他者受容の4因子全てにおいて，有意な主効果が見られた。内在化志向意識( $F(3,211)=2.93, p<.01$)，内在化志向行為( $F(3,211)=2.89, p<.01$)，外在化志向意識( $F(3,211)=2.66, p<.01$)，外在化志向行為( $F(3,211)=1.71, p<.01$)。それぞれにおいて，Holm法による多重比較の結果を見ていく。内在化志向意識では，LLグループがLHグループより有意に高かった。( $t(208)=2.58, p<.01$)。内在化志向行為では，LLグループやHLグループがLHグループより有意に高かった。( $t(208)=2.33, p<.01$; $t(208)=2.27, p<.01$)。外在化志向意識では，LHグループやHHグループがLLグループより有意に高かった。( $t(208)=2.38, p<.01$; $t(208)=2.05, p<.01$)。外在化志向行為では，LHグループがLLグループより有意に高かった。( $t(208)=2.26, p<.01$)。これらをTable12に示す。

次に，忠誠基盤コードでも，他者受容の4因子全てにおいて，有意な主効果が見られた。内在化志向意識( $F(2,207)=2.27, p<.01$)，内在化志向行為( $F(2,207)=5.63, p<.01$)，外在化志向意識( $F(2,207)=3.17, p<.01$)，外在化志向行為( $F(2,207)=2.72, p<.01$)。それぞれにおいて，Holm法による多重比較の結果を見ていく。内在化志向意識では，HLグループがHHグループより有意に高かった。( $t(205)=2.11, p<.01$)内在化志向行為では，HLグループがHHグループやLHグループより有意に高かった。( $t(205)=2.92, p<.01$; $t(205)=3.02, p<.01$)外在化志向意識では，LHグループやHHグループがHLグループより有意に高かった。( $t(205)=2.10, p<.01$; $t(205)=2.33, p<.01$)。外在化志向行為では，LHグループやHHグループがHLグループより有意に高かった。( $t(205)=1.88, p<.01$; $t(205)=2.21, p<.01$)。

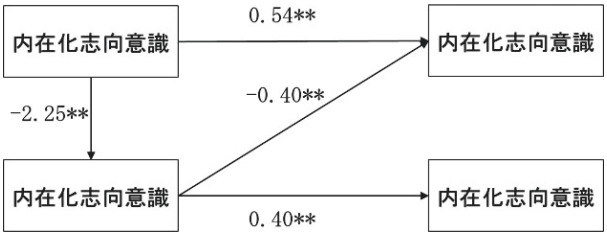

Figure1　他者受容の因子間の影響関係

他者受容尺度と発言抑制尺度，それぞれの因子間の影響関係をモデル化するため，構造方程式モデリングを行った。内在化志向意識，内在化志向行為，外在化志向意識，外在化志向行為の構造方程式モデルを Figure1に示す。Figure9の適合度は，CFI=0.99,RMSEA=.01と適合していると判断した。

## 考　察

本研究では，道徳基盤に対する道徳意識，寛容性と他者受容の関係について検討した。道徳基盤に対する道徳意識を検討するために，場面想定による態度を測定する課題を自作した。寛容性については，長谷川(2014)を参考にして，各道徳基盤における自身の考えと反対の考えの人間と友達になりたいかを尋ねた。他者受容意識を測定するために，吉田・澤野・服部(1991)の他者受容に関する項目を用いた。以下，本研究で得られた結果をまとめる。

道徳意識に関しては，道徳基盤の領域にかかわらず道徳意識は平均値で6以上であった。日本の大学生を対象とした場合，領域にかかわらず高い道徳意識があることが示唆された。寛容性については，領域にかかわらず中

位点よりも低かった。高い道徳意識を自覚する場合，自らの価値観と対立するものに対する寛容性は高くはならない可能性があることが指摘される。このような，主張が自分の考えと一致していれば論理的妥当性とは無関係にその主張を妥当と判断し，異なっていれば妥当ではないと判断する傾向のことを信念バイアスやマイサイドバイアス(近藤，2021；小野田，2015)という。道徳的な判断においてもバイアスのような無自覚な過程が影響している可能性が示唆された。他者受容については，　内在化志向は中位点よりも低く，外在化志向は中位点よりも高かった。本研究では，外在化志向は逆転項目として処理している。そのため，他者受容における外在化志向が高いというよりは，他者の受容を外在化しない傾向を反映している可能性がある。

本研究では，道徳意識と寛容性のそれぞれで高低に分け4群を設定して他者受容志向との関係を検討した。その結果，ケア基盤については，内在化志向意識と行為ともにHHがLH,HLよりも有意に低かった。公正基盤でもHHがLHよりも有意に低かった。忠誠基盤では内在化志向意識や行為においてHHがHLやLHよりも有意に低かった。HHは道徳意識も寛容性も高いグループである。内在化志向は，他者受容を内的要因に帰属する傾向である。道徳意識と寛容性の両方が高い場合，他者受容に外在化の過程は関係しないことが示された。すなわち，道徳基盤にかかわらず，道徳意識と寛容性の両方が高い場合は，他者受容に外在化志向の影響は低いことが示された。これに対して忠誠基盤ではLHやHHがHLよりも有意に高かった。HLはその道徳基盤の道徳意識が高く寛容性が低いグループである。忠誠基盤のHLとは忠誠基盤意識が高く忠誠基盤意識が低い人とは友達になりたくない傾向のグループである。LHやHHは寛容性が高いグループである。忠誠基盤における寛容性が高い場合，外在化志向が高いことを示している。ただし，本研究では，外在化志向の得点を逆転して処理しているため，外在化志向しない傾向の高さを示している。本研究では，忠誠基盤は，仲間に対して裏切りをしてはいけないという内容の項目であった。忠誠基盤に関係するような内容について寛容性が高い場合，他者受容には外在化志向の影響は高くないことが示された。

本研究では，道徳基盤に対する道徳意識や寛容性が他者受容に及ぼす影響について検討した。忠誠基盤における寛容性が高いと他者受容における外在化志向が高いという結果であった。これは寛容性の原因を他者に帰属するということである。忠誠基盤の寛容性が高いと他者に対してポジティブな評価を行う傾向が高くなることを示している。属する集団への忠誠意識に対して自らとは反対の価値を持つものとも友好関係を形成したいと考えることと他者に対するポジティブな評価には関連性があることを示唆している。過剰に高い忠誠基盤に対する道徳意識は政治的に対立するものに対する忌避的態度を引き起こす(ハイト，2014)が，本研究で得られた結果は，道徳意識と道徳的な行動の関連性を検討する場合，道徳基盤に対する寛容性も併せて検討することの必要性を示唆している。このような他者への受容的態度の向上に関する小学校における効果的な教育的介入として，コンピテンシーに焦点化したインフュージョンアプローチがあげられる(沖林・阿濱・岡村，2020)。社会的に一つの結論が決められない問題に対して，自身の考えに関する根拠に意識的になることが他者に対する社会的な批判的思考態度を高める結果につながっている(重枝・宮木・沖林，2020)。

## 引用文献


Haidt, J. (2012). *The righteous mind*. Brockman Inc., New York.
(ハイト，J．高橋洋(訳)(2014) 社会はなぜ左と右にわかれるのか　対立を超えるための道徳心理学　紀伊国屋書店)

長谷川真里 (2014). 信念の多様性についての子どもの理解：相対主義・寛容性・心の理論からの検討，発達心理学研究，25，4, 345-355.

清兼渚・鈴木友美・五十嵐哲也 (2013). 青年期における自己受容・他者受容のバランスと発言抑制，愛知教育大学教育臨床総合センター紀要, 4, 25-32.

近藤大貴 (2021). 新型コロナウイルスの態度から探る信念バイアスの発生メカニズム，第35回人工知能学会全国大会論文集，1-4.

京都府教育委員会 (2018). 道徳教育の進め方　京都式ハンドブック，3-5. http://www.kyoto-be.ne.jp/ed-center/cms_files/kensyusien/dotoku/doc_dotoku_2018_all.pdf(最終閲覧日：2021年9月24日)

文部科学省 (2017). 小学校学習指導要領(平成29年告示)解説特別の教科　道徳編　https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2019/03/18/1387017_012.pdf(最終閲覧日：2021年9月24日)

沖林洋平・阿濱茂樹・岡村吉永 (2020). 附属山口小学校の「創る科」が育成するコンピテンシーの検討，山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要，50，341-348.

小野田亮介 (2015). 児童の意見文産出におけるマイサイドバイアスの低減―目標提示に伴う方略提示と役割付与の効果に着目して―　教育心理学研究，63,

121-137.
沢崎達夫 (1985). 自己受容に関する文献的研究(2)　自己受容と関連する諸要因について　教育相談研究, 23,43-56.
重枝孝明・宮木秀雄・沖林洋平 (2021). インフュージョンアプローチ型授業が児童生徒の批判的思考態度に及ぼす影響，学習開発学研究，13，107-115.
上村有平 (2007). 青年期後期における自己と他者受容の関連　個人志向性・社会志向性　個人志向性社会性・社会志向性を指標として，発達心理学研究, 18,132-138.
Wainryb,C.,Shaw,L,A., & Maianu,C. (1998). Tolerance and intolerance Children's and adolescent's judgments of dissenting beliefs, speech, persons, and conduct. *Child Development* ,69,1541-1555.
吉田昭久・澤野有香・服部智 (1991). 自己受容の基底因Ⅵ，茨城大学教育学部紀要（教育科学）,41,289-308.

## Appendix

道徳基盤における道徳意識と寛容性の項目

1. 赤ちゃんは守るべきである (ケア基盤)
　→1の価値観において，自分と真逆の人と友達になりたい
2. 人から親切なことをしてもらったときにそれ相応の行動をとるべき　(公正基盤)
　→2の価値観において，自分と真逆の人と友達になりたい
3. 仲間に対して裏切りをしてはいけない(忠誠基盤)
　→3の価値観において，自分と真逆の人と友達になりたい
4. 人から借金を繰り返す人にお金を貸せない(背信基盤)
　→4の価値観において，自分と真逆の人と友達になりたい
5. 道にごみは捨ててはいけない(神聖基盤)
　→5の価値観において，自分と真逆の人と友達になりたい